

# 前期 Chatman の方法論が情報利用研究に持つ意義

粟村 倫久 (慶應義塾大学大学院・日本学術振興会特別研究員)

awamura@slis.keio.ac.jp

## I. 研究の背景と目的

1990年代中盤以降より、情報探索・利用が埋め込まれる社会的文脈を重視した研究が、情報利用研究の大きな動向となっている<sup>1</sup>。

2002年に没した Elfreda A. Chatman は、上の研究動向を推進した代表的研究者の一人だった。彼女は、一貫して、社会的弱者とされる人々の情報探索・利用について研究した。研究キャリア当初より、自然主義的アプローチを採用し、研究対象の人々が形作る「小さな世界」を描く中範囲の理論を提出した<sup>2</sup>。

方法論の側面からより詳細に見れば、彼女の研究は前期 (1980年代～1990年代中盤)・後期 (1990年代中盤～2000年代初頭)の二期に分かれる。前期の研究は、各時点で彼女が対峙する課題に関係ありそうな既存の理論を、フィールドワーク (FW) により収集したデータに適用し、アノマリー

(anomaly; 理論に当てはまらない現象) を重視して問題領域を絞り込むものである。前期は更に、CETA (総合的雇用・訓練法) 研究、用務員研究、Garden Tower (介護付高齢者住宅) 研究に分けられる。後期の研究は、前期の研究をまとめる形で、あるいはそれらを出発点として、自らの理論を提示するものである。「情報貧困の理論」「囲われた日常生活 (life in the round) の理論」「規範的行動の理論」の三つである。

彼女が後期に提出した理論は、現在の研究でしばしば言及・利用される。これは、例えば、米国情報学・情報技術協会 (ASIS&T) 2006年年度大会でのパネル『Chatman への接近』に顕著である<sup>3</sup>。一方、現在まで、前期 Chatman の方法論を巡る本格的な考察はない。むしろ、筆者は、本論で詳述するように、彼女の前期の方法論を巡る検討こそ、情報利用研究に新たな基礎的知見をもたらすと考える。

そこで、本研究は上の方法論が情報利用研究に持つ意義を明確にすることを目的とする。具体的には、(1) Chatman 自身の研究の発展に、上記の方法論がどのように貢献したか、(2) その方法論から、情報利用研究の基底にある現象の捉え方についての新たな観点があるか、の二点を論じる。

## II. Chatman の研究の進展とアノマリー

### A. アノマリーとしての四つの概念

Chatman は、自らの研究にとって、前期の研究を通じて見出された次の四つの概念が重要であった、と述べている。「情報貧困の理論」等の一連の理論は、その四概念を様々に参照するものとして形成・提出された。

1. 「リスクを取ること」…行為者が、自らの立場の自己防衛とリスクを天秤にかけ、後者を優先する形で情報を入手しようとする事
2. 「秘密」…行為者が、自己防衛のため、他者に情報を秘匿すること
3. 「嘘」…行為者が、自己防衛のため、他者に事実と異なる情報を伝えること
4. 「状況的レリヴァンス」…ある事物が、行為者にとって情報としての意味を持つ (レリヴァントなものとなる) のは、行為者が埋め込まれる状況との関係の下にあつてのことであるということ<sup>35</sup>

Chatman は、「[四概念は]アノマリーとして現れた<sup>34</sup>」、と述べている。従って、四概念は経験的データへの理論の適用を通じて出てきたアノマリーに応える形で導出された、ということになる。次節では、彼女自身による研究過程の述懐<sup>34</sup>を参考に、彼女の研究の進展の中での四概念の導出過程を、アノマリーに重点を置いて再構築する。

## B. 四概念とアノマリー

下記は、前期の主要な研究のリストである。

- CETA 研究…博士論文<sup>6</sup> (①)、『フィールド研究』<sup>7</sup> (②)、『普及理論の適用』<sup>8</sup> (③)、『オピニオンリーダーシップ、貧困、情報共有』<sup>9</sup> (④)
- 用務員研究…『単純労働者の情報世界』<sup>10</sup> (⑤)、『疎外理論』<sup>11</sup> (⑥)、『小さな世界の中での生活』<sup>12</sup> (⑦)
- Garden Tower 研究…『老後を過ごす女性たちの生活世界』<sup>13</sup> (⑧)

### a. CETA 研究

CETA 研究での研究対象は、CETA プログラムの下、臨時職員として働いている女性たちである。①では、女性たちの情報伝達・共有を情報の普及として分析しようとの着想から、普及理論とオピニオンリーダーシップ論が適用されている。②～④の論文は①の構成章の内容をまとめる形で提出されている。

この研究で Chatman は大きく二つのアノマリーを報告する。一つは、ある種の情報は、それが有する価値の点で、物や技術とは異なる、ということである。普及理論では、物や技術はそれらが普及されるほど影響が増すとされるが、職業情報（求人情報や、職に就き続けるための情報）はそうではなく、早く気づいた人にとっては価値があるが、遅く気づいた人には価値がない。もう一つは、普及されない情報もありうる、ということである。普及理論やオピニオンリーダーシップ論では、物や技術は普及されるものとされる。しかし、職業情報は、家族等の近い立場にある人々とは共有されるが、同僚とは共有されなかった。

### b. 用務員研究

上のアノマリーを元に、Chatman は、なぜ社会的弱者の間で情報共有がなされないのかという問いを別の安定した集団で深めるという意図の下、彼女が所属する大学の用務員を対象とした研究に取りかかる。FW の結果報告という色合いが強い⑤では CETA 研究と共通する知見に加え、雇用側が用務員同士での勤務中の会話や情報収集を嫌うこと、用

務員たちは自分たちが大学コミュニティから疎外されていると感じていること、同僚の間の相互疎外感のために用務員同士が有用な情報を共有しないことが見えてきた。情報共有がなされないことに社会構造と疎外感が関係しているのではないかと考えた Chatman は、⑥で疎外理論を FW データに適用する。そして、「用務員たちが雇用側に対する情報収集や共有を必要最低限しかしないことを選択することと、上司への不信感や疎外感・現状を受け入れるしかない自身への無力感との関係」「競争関係から来る相互不信感・疎外感のために、用務員たちが日常的な情報共有の経路を互いの間で持っていないこと」等を描く。用務員の生活の中で、意図的に情報を共有しないこと（情報の秘匿）や情報源に接近しないこと（情報忌避）は、社会的立場を維持する手段となっている。Chatman は、上の結果を元に満足理論を適用した⑦の研究に入っていくが、本稿では詳細は割愛する。

まとめれば、用務員研究では、「情報共有がなされない」という先の研究のアノマリーの内実がより詳細に分析されている。

### c. Garden Tower 研究

前期最後の研究⑧では、高齢者住宅に住む老後を過ごす女性たちの FW データに、社会ネットワーク理論が適用されている。この研究では、Chatman が理論産出に転じる契機となったというアノマリーが見出された。それは、家族・姻戚関係といった最も近いネットワークですらある人を支援できない場合があることで、社会ネットワーク理論の「社会ネットワークは、それに含まれる人を支援する」という中心的命題と矛盾し、日常的な情報ニーズ・探索に関わる研究の知見とも矛盾するものであった。例えば、どこそこが痛い、ということを家族に伝え、その治療法を聞くことは、健康状態が深刻であることを家族に伝えることになり、結果、ある程度の生活の自由を担保されている高齢者住宅からの退去につながるのである。従って、女性たちは、家族に対してでさえ、健康状態を秘密にしたり時に嘘をつくことにより、リスクを取る（情報収集・共有する）ことを避ける。

上のアノマリーから、社会的弱者の生活世界は、通常の社会世界とは異質のものであることが導かれる。Chatman は、⑧を境に、リスクを取る事、秘密、嘘の三概念に、CETA 研究時点から明らかになっていた情報は等価値ではないという知見を状況的レリヴァンスとして加えた四概念を用い、通常の生活世界から見て異質な社会的弱者の生活世界と情報探索・利用の関係を説明する「情報貧困の理論」の産出に向かった。

本稿の範囲を超えるためごく簡潔に留めるが、後期には、情報貧困の理論と追加のFWを元に、小さな世界と人々があえて情報探索を行う場合の関係を描く「囲われた日常生活の理論」、情報探索・利用と社会的規範の関係を描く「規範的行動の理論」が提出される。

### C. 理論の道具的適用。

前節での議論から、前期の彼女が、課題に応じて、理論の妥当性のある程度所与のものとしながら各々の理論を道具として使い分け、問題領域を絞り込んでいったことが見えてくる。つまり、彼女は、理論を言えば道具的に適用し、出てくるアノマリーを新たな理論の形成に生かす、という観点に立っている。

詳述できないが、少なくとも 1990 年代中盤までの他の情報利用研究と比べ、上の観点は特異であったと言っている。このことが、前期 Chatman の真意を汲み取りづらいものとしている<sup>14</sup>。Brenda Dervin は⑧の書評において、より説明力のある理論を選択する余地があったと評したが<sup>15</sup>、この指摘は Chatman の方向と異なると思われる。むしろ、理論の道具的適用という前期の彼女の方法論は、後期の理論範囲となる「既存の情報利用研究で説明されていない論点」を明瞭化した。つまり、この方法論は、後期の理論を根拠づけた。

次章では、アノマリー自体から示唆される、現象の捉え方についての新たな観点を論じる。

## III. 現象の捉え方についての新たな観点

### A. 一次的構成概念と二次的構成概念

アノマリーは、理論と社会現象は同一ではないことの表れである。理論と社会現象は同一ではないという至極当たり前に見えること

を、社会科学の重要な論点として考察・整理した研究者に、Alfred Schutz がいる。Schutz は、人間の活動を扱う社会科学にとって重要なのは、研究者が社会現象を研究する以前に、人々自身が活動の中で意味を構築していることである、と論じる。そして、人々自身が意味を構築する際に参照する概念を「一次的構成概念」、研究者が対象となる人々の活動を説明する際に参照する概念を「二次的構成概念」として類型化した<sup>16</sup>。

### B. エスノメソドロジー

Schutz の類型によれば、理論を用いて対象となる人間活動を説明することは、二次的構成概念を用いる方法である。言うまでもなく、この方法は多くの優れた知見を生んできたしこれからも生んでいこう。

加えて、Schutz の類型化から、現象の捉え方について、もう一つの選択肢となる観点があり得ることが示唆される。それは、理論を用いた説明以前に、既に人々が参照している一次的構成概念や、人々が構築している一次的な活動とそこにある秩序に着目する、というものである。具体的には、人々自身が既に秩序立てて構築している一次的な活動が一連の行為を通してどのように成り立っていくのか、活動の構築と一次的構成概念や一次的構成概念との関係で人々が構成する意味がどのように関係するのか、といったことに着目し、それを再構築して示そうとする。この観点による研究プログラムを「エスノメソドロジー」として初めて提示したのが、Harold Garfinkel である<sup>17</sup>。

### C. Chatman とエスノメソドロジーの違い

先に述べたように、前期 Chatman は、理論を道具的に適用し、出てくるアノマリーを新たな理論の形成に生かす、という観点に立っている。例えば、社会ネットワーク理論の中心的命題に反するアノマリーとして嘘や秘密という現象があり、それが情報貧困の理論の形成に生かされた。つまり、Chatman は、二次的構成概念である理論の説明範囲が及ばないことがあるということに焦点を当て、説明範囲が及ばない現象を、新たな理論を形成することによって説明しようとした。

一方で、エスノメソドロロジーでは、どのような理論にとっても、説明範囲から外れるアノマリーが出てくること、そして、研究者が理論を用いて説明する以前に人々が一次的な活動を既に秩序だったものとして構築・達成していることの両面から、改めて理論を持ち込むことなく活動の構築過程を分析する<sup>18</sup>という形に、現象の捉え方自体を転換する。

Chatman と、Garfinkel の提出したエスノメソドロロジーは、理論の説明範囲に着目した点で共通する。しかし、既に示唆されているように、その着目の仕方には大きな違いがある。Chatman は、新たな理論形成が必要な範囲の明瞭化という文脈において理論の説明範囲に着目しているという点で、二次的構成概念である理論を用いて対象となる人々の活動を説明するという枠の中で研究を進めている。一方で、エスノメソドロロジーは、どのような理論にとっても説明範囲から外れるアノマリーが出てくることから、むしろ、一次的な活動や一次的構成概念そのものに着目するという形に、現象の捉え方を転換した。

エスノメソドロロジーは、社会学や CSCW といった他分野で豊富な研究の蓄積を持つが、図書館・情報学および情報利用研究にはごく最近導入された<sup>19</sup>、分野にとって新しい観点である。そのため、それが当分野に持つ有効性や具体的な適用法の本格的な検討が、これから必要とされる。エスノメソドロロジーに依拠した情報利用研究の基礎付けを行う上で、エスノメソドロロジーとの間に上のような共通点と差異を併せ持つ前期 Chatman の方法論と実際の研究は、重要な検討・比較対象となると位置づけられる。

#### IV. 結論

II 章で述べた通り、前期 Chatman がとった理論の道具的適用という方法論は、後期の理論の範囲となる「既存の情報利用研究で説明されていない論点」を明瞭化した。つまり、この方法論は、後期の理論を根拠づけ、情報利用研究の知見の拡大に貢献している。

更に、前期 Chatman の方法論は、情報利用研究にとって新たな現象の捉え方であるエ

スノメソドロロジーとの間に、III 章に述べたような共通点と差異を併せ持っている。従って、エスノメソドロロジーに依拠した研究の基礎付け、つまり、それが当分野に持つ有効性や具体的な適用法を本格的に検討する上で、彼女の前期の方法論は、重要な検討・比較対象を提供している。

<sup>1</sup> Pettigrew, Karen E.; Fidel, Raya; Bruce, Harry. Conceptual Frameworks in Information Behavior. *Annual Review of Information Science and Technology*, 2001, vol.35, p.43-78.

<sup>2</sup> Burnett, Gary, et al. Channelling Chatman: Questioning the Applicability of a Research Legacy to Today's Small World Realities. ASIS&T Annual Meeting 2006. Austin, Texas, November 3-9, 2006.

<sup>3</sup> Chatman, Elfreda A. The impoverished life-world of outsiders. *Journal of The American Society for Information Science*. 1996, vol.47, no.3, p.193-206.

<sup>4</sup> Chatman, Elfreda A. Framing social life in theory and research. *The New Review of Information Behaviour Research*. 2000, vol.1, p.3-17.

<sup>5</sup> Chatman の論述を元に、筆者がまとめた。

<sup>6</sup> Chatman, Elfreda A. The Diffusion of Information among the Working Poor. Ph.D Thesis, University of California, Berkeley, 1983, 270p.

<sup>7</sup> Chatman, Elfreda A. Field Research: Methodological Themes. *Library & Information Science Research*. 1984, vol.6, p.425-438.

<sup>8</sup> Chatman, Elfreda A. Diffusion Theory: A Review and Test of a Conceptual Model in Information Diffusion. *Journal of the American Society for Information Science*. 1986, vol.37, no.6, p.377-386.

<sup>9</sup> Chatman, Elfreda A. Opinion Leadership, Poverty, and Information Sharing. RQ. 1987, vol.26, p.341-353.

<sup>10</sup> Chatman, Elfreda A. The Information World of Low-Skilled Workers. *Library & Information Science Research*. 1987, p.265-283.

<sup>11</sup> Chatman, Elfreda A. Alienation Theory: Application of a conceptual framework to a study of information among janitors. RQ. 1990, vol.29, p.355-368.

<sup>12</sup> Chatman, Elfreda A. Life in a small world: Applicability of gratification theory to information-seeking behavior. *Journal of the American Society for Information Science*. 1991, vol.42, no.6, p.438-449.

<sup>13</sup> Chatman, Elfreda A. The Information World of Retired Women. Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1992, 150p.

<sup>14</sup> 田村俊作. “第 4 章 情報利用の社会的意義”. 情報探索と情報利用. 東京, 勁草書房, 2001, p.189-227.

<sup>15</sup> Devin, Brenda. *Reviews. Library Quarterly*, 1993, vol.63, no.4, p.532-534.

<sup>16</sup> アルフレッド・シュッツ. “I. 人間行為の常識的解釈と科学的解釈”. M. ナタンソン編. 渡部光, 那須壽, 西原和久訳. アルフレッド・シュッツ著作集 第 1 巻 社会的現実の問題 [I]. 東京, マルジュ社, 1983, p.49-108.

<sup>17</sup> Garfinkel, Harold. *Studies in Ethnomethodology*. Cambridge, Polity Press, 1967, 288p.

<sup>18</sup> 水川喜文, 池谷のぞみ. “第 3 章 エスノメソドロロジーの方法 (2)”. 山崎敬一編. 実践エスノメソドロロジー入門. 東京, 有斐閣, 2004, p. 36-49.

<sup>19</sup> Garcia, A.C. et al. *Workplace Studies and Technological Change. Annual Review of Information Science and Technology*. vol. 40, 2006, p. 393-437.